

西鶴雑話ものの性格

水田潤

五六

説話文学の系列が「咄し」を契機として發生し、庶民の素朴な求知欲に胚胎するものであり、その基盤を巷間世俗に置くことは言うまでもない。そして、説話文学盛行の背後には常にその時代の素朴な民衆の存在が予想せられる。従つて、本来的に説話文学には絢爛たる抒情のロマン性・意図的文芸性は稀薄である。そしてそれは、その發生の胚胎期に於ては、たとえ「雑談ノ次ニ教門ヲヒキ、戯論ノ中ニ解行ヲ示ス」の「沙石集」序や、「閑に諸法実相の理を案ずるに、かの狂言綺語の戯、かへりて讚仏乗の縁たり」の「十訓抄」序が示すように、いわば解行を示し賛仏乗のための目的をもつて書かれたものであり、平安末の「今昔物語集」をはじめ、「宇治拾遺物語」「十訓抄」「發心集」「沙石集」など、十指に余るものが挙げられる。そしてそ

の時勢粧とともに、その殆どが仏道入門書性格、また「昔今の物語をたねとして、よろづの言の葉の中より、聊其二一の跡を記し取て、よき方をば是をすゝめ、あしきすぢをば是を誡めつゝ、いまだ此道を学びしらざらん少年のたぐひをして、心をつくる便となさしめむため」(註1)「物羨みはせまじき事なり」(註2)の教訓的性格をもち、あくまでも賛仏乗・世俗啓蒙の方便的性格を脱していない。輯録の説話素材もまた、たとえば「今昔。淡海公ト申ス大臣御マンケリ」(註3)「京極太政大臣宗輔公は——」(註4)「一院鳥羽殿に渡らせおはしましける頃」(註5)など、殆どが享受者大衆のものではなく、示される理想世界も「優美・優雅」の平安宮廷社会的美意識でさえもあつた。(もちろんそれらにも、「鬼にこぶとらるゝ事」その他、庶民的ベニス・市井的親近感をもつものもないではない。)

しかも、説話欲求の一義的性格は、その賛仏乗の教訓的発想・消極的因果律の規範に制約せられ、それが一面では享受者自身の無知と素朴な勸懲の憧憬思慕と相まつて説話文学自体の性格を形成しつゝ、近世仮名草子の説話系列に導入せられたのである。しかしもちろん、これには「十訓抄」序の「狂言綺語そのまゝともいふべき」(註6)「児のかいもちするにそらねいりしたる事」などの童話笑話の類があり、これが「物真太郎」「一寸法師」のさらに素朴な享受者を対象とする御伽草子の系列となり、同様に仮名草子への一支流を形成している。「恨之介」(慶長)「薄雪物語」(宝永の仏教思想、「二人比丘尼」(寛文)「清水物語」(宝永の崇仏教訓性、「可笑記」(宝永の儒教臭、「醜醉笑」(天和)「竹斎」(寛永などすべて、それを証するようである。また、系譜的には先行御伽草子の楽天性・娯楽性に胚胎する大衆性は、さらに時代の享楽思想を反映し、了意の「浮世物語」(寛文)となり、「竹斎」の遍歴体「仁勢物語」(寛永の戯文体の流れの中に、次の浮世草子の娯楽の開花を予想せしめる。さらにもう一つには「剪燈新話」を典拠粉本とする怪異譚の系列がある。

以上で説話文学一般の性格をうかがうことが出来るが、これを要するに中世ならびに近世初期の説話文学は、素因としての享受者大衆の説話求知の欲求を基盤としながら、

その現象に於て余りに賛仏乗・倫理的教訓的要因をもつて成立し継承せられて来た。もとよりこれが、啓蒙期の素朴な人間の自覚と、その方向を同じうしたとは言え、余りに他力的要因をもちすぎていた。こゝに、現実生活の充実と民衆の町人としての経済的自立は、必然的に元祿の生の自覚、人間的娯楽追求の町人生活となり、浮世草子の開花にいたらしめるのであるが、これだけでは未だ公式論的展望にすぎない。

たとえば、こんにちのインテリゲンチヤも一方では浪曲講談の享受者であつたり、怪異神仙に驚異し、伝奇的事象に関心するように、よし仮に元祿文明開化の読書大衆の興味が好色耽溺にあつたとしても、人間共通の説話求知の欲求が、中世啓蒙期の大衆のそれから飛躍的変革をとげたとは考えられない。「見聞談叢」西鶴伝中、黒田侯が大坂の屋敷で西鶴の咄しに興じたとする記録は、それを明確に論証する。

つまり、いつの時代でも、人間の奇譚珍談への関心は本質的に変革せられるものではなく、まして、通信交通の発達こんにちの如くではない近世期のそれが、中世の素朴さと素因として変ることのないことが了承せられる。こゝに、前記「見聞談叢」に見られる咄しの提供者が上下尊卑を問わずに求められるのであり、たとえば、淀川下りの舟中に

京大阪越後の咄しがジャーナリスティックな興味と関心をもつて乗合衆に喝采せられたのであり、そこに西鶴のいわゆる雑話系列数篇が用意せられたのである。

註1 「十訓抄」序

註2 「宇治拾遺物語」巻第一ノ三「鬼にこぶとらるゝ事」

註3 「今昔物語集」巻第廿二「淡海公継四家語第二」

註4 「十訓抄」第一「可施入惠事」ノ九

註5 「古今著聞集」第九「弓箭第十三」

註6 「宇治拾遺物語」巻第一ノ十二

* こゝで「民衆」ということばを使つたが、これは貴族に対する庶民一般という意味であり、必ずしも真向からふりかざされた標榜としてのそれを指すものではない。拘泥しないで読んでいただければ幸である。

二

ところで、西鶴のいわゆる雑話ものと言われる諸作品は、先行「一代男」「二代女」その他の構成的統一、また、「永代蔵」「胸算用」その他の主題的統一性をもつて対し雑纂的であり、素朴な意味では諸国の珍説奇譚の輯録にすぎない。主題の喪失とも題材主義の作品とも言われる所以でもあるが、またそれだけに本来的な作者の素材に対する姿勢は、たとえば「一代男」の好色、「永代蔵」の致富一辺倒に比較して自由である。同時に、これらがいわゆる諸国咄

されたい。「雑談ノ次ニ教門ヲヒキ、戯論ノ中ニ解行ヲ示し、「拙キ語ヲアザムカズシテ、法義ヲサトリ、ウカレタル事ヲタゞサズシテ、因果ヲリキマヘ、生死ノ郷ライヅル媒トシ、涅槃ノ都ニイタルシルベトセヨ」の目的をもつて書かれたのと、西鶴の「是を思ふに人はげけもの世にないものはなし」「世間の広き事国々を見めぐりてはなしの種をもとめ」「今の世の慰さみ章」にせんとの提唱の相異がいかなるものであるかは大略了解せられるであろう。また、こうした提唱によつてもたらされた説話が、その文芸性の有無にかゝらず、享受者大衆にいかにか受けとられ既読せられたかも想像に難くない。こゝに、同じく説話文学の系列に属しながら、西鶴における説話のそれと、先行諸作品のそれとの本質的差異がはつきりと了解せられる。ところで、この間の事情をさらに明確に示すものに、同じく「懐硯」序がある。

雨の夜草庵の中の楽しみも旅しらぬ人の詞にや亦人のいへるありしらぬ山しらぬ海も旅こそ師匠なれと我朝くわらんぢのあたらしきをたのみたくゆたんのあかなるゝをわざにて……或はおそろしく或はおかしく或は心にとまる人の咄しをくきみじかき筆して旅せぬ人にと如左

こゝに、西鶴が言うように、これらはたんに怪異奇譚の輯録集たるにとどまらず、彼の「心にとまる」事象へのポ

としての珍説奇譚の類聚としての説話文学であるかぎり、それらが文献的典拠をもつものであれ、巷間流布の説話に取材のものであれ、いわば説話原像自体の或る制約をもつ。しかしそれにもかゝらず、同じ素材原像に取材のものであつても、取材者の取材意識からおのずと異らうし、主題・要因の面でも原像のそれとはおのおの異質のものとなること予想せられる。従つて、創作意識の低調と作品としての低回性を指摘せられる題材主義主題喪失の雑話系列ではあるが、反つてそれだけに、いわばポーズなしの西鶴の赤裸の作家的関心の所在が探り得られるのではなからうか。

世間の広き事国々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ熊野の奥には湯の中にひれふる魚あり筑前の国にはひとつをさし荷ひの大蕪有豊後の大竹は手桶となりわかさの国に二百余歳のしろびくにのすめり……是をおもふに人はげけもの世にない物はなし

「西鶴諸国咄」(大下馬)序である。こゝでもう一度「沙石集」序を見よう。

見シ事、聞シ事、思出ルニ随テ、難波江ノ、ヨシアシヲモエラハズ、藻塩草手ニマカセテ、カキアツメ云々

「諸国咄」序の説話採集態度との類似に気付く。しかし、「沙石集」が「狂言綺語ノアダナル戯ヲ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道ニ入レ、世間浅近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知ラシメン」の意図から(前掲「十訓抄」序も参照

ズなしの関心がある。或意味では、これら「或はおそろしく或はおかしく或は心にとまる」事象の輯録を通じて、結局すべての現象を普遍に於て見、現実社会の珍奇の存在を否定し去らうとの意図さえも見える。「人は実あつて偽りおほし」「笑ふにふたつ有人は虚実の人物」こうしたことばをくりかえすかれは、説話文学としての読者の興味に依存しながら、虚実の、或いは偽り多き広き世界を道化した眼と手で描くのである。

註7 暉峻康隆「西鶴評論と研究」

註8 「立命館文学」一九五四・五(第一〇八号)拙稿中、私は雑話ものの執筆の西鶴の姿勢を評して「ジャーナリスティックな」「気取つた姿勢」と規定したが、本論に言う「ポーズなし」とは、前論の所説を覆してかく言うのではなく、こゝでは説話素材への無作為性を指すのである。

註9 「本朝桜陰比事」巻一ノ一「春の初の松葉山」

註10 「永代蔵」巻ノ一「初午は乗つて来る仕合」

註11 「新可笑記」序

三

まず、最もポピュラーなものとして、「諸国咄」巻四ノ二「忍び扇の長歌」を見よう。

大名の姫と身分のへだたる男との悲恋を描く一篇である。「人間と生を請て、女の男只一人持事、是作法也、あの方

下々を、おもふは是縁の道也。おの／＼世の不義といふ事をしらずや云々」、不義故の自害を言われる姫の身分制度への反逆、人間性謳歌の主張である。これは、西鶴にとつてこの作だけの世界ではなく、「清十郎ころさばおなつちもころせ」の心であり、また、「それ人間の一心万人ともに替れる事なし、長劍させば武士十露整をきて商人をあらはせり」の主張に通ずる。ところでつづく姫のことは「夫ある女の、外に男を思ひ、または死別れて、後夫を求るこそ、不義とは申べし、男なき女の、一生に一人の男を、不義とは申されまじ」は、西鶴の倫理観の限界、また、たんに西鶴個人の限界ばかりではなく、いわば近世日本の倫理のリミットでもあつた。これらについては、これまで諸家によつて論じつくされてるので重複はさけるが、これはたとえば、「懐硯」巻一ノ四「案内しつてむかしの寝所」の「其後こゝろしづかに女をさしころし木工兵衛をうつて捨其刀にして其身もうせける鄙びたるおとこの仕業には神妙なる取置ぞかし」の、西鶴の男女倫理の理想像にも通ずる。また、この夫ある女の不義への掟が、当時いかなるものであつたかは、「本朝桜陰比事」巻二ノ四「恨千万近所へ縁付」に、「女は鼻をそぎ男は鬢を払ひ」の裁きが具体的に示している。

ところで、諸国咄系列に西鶴の世俗人心への関心ほどのばならぬ。

無仏の世界は、傘といふ物を、見た事のなければ、驚き法体老人あつまり、此年迄聞伝へたる、様もなしと申せば、其中にこざかしき男出て、此竹の数を説に、正しく四十本也、紙も常のとは格別也、かたじけなくも、是は名聞し、日の神、内宮の御したい、爰に飛せ給ふぞと申せば……

前の「二王門の綱」の愚蒙に通ずる戯画である。結末の妙と相まつて、西鶴の面目躍如たるものがある。これをおのの俳諧的手法と言え言えようが、この健康な哄笑の裏にひそむべき世界を知らぬ、「今もおろかなる」世の人心への鋭い諷刺を見逃すことは出来ぬと思う。

そして、この求知を契機とする世界の事象の実証的探求が「懐硯」巻五ノ二「明て悔しき養子が銀筥」に「世になき物は郷の刀と化物と人の内証に金銀ぞかし」の痛烈な風俗時評として展開せられる。

外聞ばかりの斜陽族篠原屋一家の苦肉の策の破れ様を描写して余すところがない。私は前にこの種説話を、近世資本主義経済機構の破綻の内部的矛盾への文明批評の鋭さとして述べたが、文中「近比はづかしけれども世は張もの」の篠原屋主人の述懐は、この間の消息を語るものとして興味深い。

同じくこれも前論で述べたが、跡継争いの総合版として、

角度からなされているか。「懐硯」巻一ノ一「二王門の綱」を見よう。

五月雨に流出の二王の片手を鬼の片腕としてとり騒ぐ群衆の蒙昧を笑う一篇である。

女房にいとまこひのさかつきし、鑢かたびら着るもあり重代をさすもあり、または筋分の大豆を懐中するもあり棒ちぎり木根、おもひ／＼にふりかたけ身ふるはしながら是を見んとひしめくは、今もおろかなるは世の人ぞかし、一幅の戯画である。

「おの／＼広き世界を見ぬゆへなり」^(註14)「一生秤の皿の中をまはり、広き世界を知らぬ人こそ口惜しけれ」^(註15)その他類例は省くが、西鶴が無知蒙昧の原因をこの秤の皿の中の経験のみに求める見聞の狭さに置き、その非実証性の故とし、くりかえし世界の広さ「世にないものはなし」の博物博覧の可能性追求を謳うことは周知であろうが、こうしたかれの主張がこゝにこの一篇として提示せられたのである。諸国咄系列執筆の真意の一つをこゝに見たいと思う。

同じくこれを「諸国咄」巻一ノ四「傘の御託宣」について見よう。これは、近藤忠義氏によれば、神の権威への人間の勝利^(註16)と見られ、暉峻氏もこれを超自然の人間化であることと解決している。しかし、そうした西鶴の積極性もさることながら、それ以前にこの説話要因について考えられね

巻二ノ一「後家に成ぞこなひ」がある。貪慾な人間性の実態への異常な関心である。

なお、こうした家督相続に関する争いが、当時いかに数多く存在したかは、「大矢数」(第五)

我甥ながら跡職の公事
海にまた末の松山欲ふかい

からも、また、公事の輯録説話「本朝桜陰比事」所載のこの種事件の輯録数からも容易にうかがうことが出来る。ちなみに、「本朝桜陰比事」四十四話中七話までが、この種遺産相続、家督争いの訴訟である。しかもこうした血で血を洗う争いは、決して遺産相続、家督相続だけにかぎつたことではなく、「本朝桜陰比事」巻一ノ三「御耳に立は同言葉」の土地争いにもなまなましく輯録せられているのである。

註12 「好色五人女」巻一「姿姫路清十郎物語」ノ五

註13 「武家義理物語」序

註14 「諸国咄」巻三ノ六「八畳敷の蓮の葉」

註15 「永代蔵」巻四ノ二「心を畳み込む古筆屏風」

註16 河出書房「日本文学講座」第四卷「近世の文学」所収「近世社会と文学」

註17 前掲拙稿(註8)

こゝで、便宜上「本朝桜陰比事」について概観しておこ

う。

夫大唐の花は、甘棠の陰に召伯遊んで詩をうたへり、和朝の花は、桜の木かげゆたかに歌を吟じ、此時なるかな御代の山も動ず、四つの海原不断の小細浪静に、王城の水きよく流のすゑの久しきひとりの翁あつて、百余歳になるまで家に杖突事もなく、善悪ふたつの耳かしく聞伝へたる物語り、今の世の慰さみ草ともなりて云々

冒頭の序文様の一節である。

さて、右の一文は、この書が「棠陰比事」をモチーフとして成ることの自注(1)とともに、次の二つの問題点を提示する。

(一) この書が悪への関心より所産せられたものであり、

また、咄しを機縁として成つたこと——(2)

(二) 戯作であること——(3)

(二)については、これをさらに「新可笑記」序に対照することによつてより明確にならう。そして(一)より、この書もまた、「本朝二十不孝」同様、この作者一連の醜悪文学の「一つと見ることが出来るように思う。もちろん、読者の興味はそれとともに、各巻各章の頓智頓才の名判決にあつたことも否めないが、同時に、この書が少くとも疑獄物語であるかぎり、読者の、そして作者の素材への関心は「悪」そのものであり、「一応「不孝」に限定せられた「二十不孝」

もいかなり、

の拷問否定の科学性に出発し、十六人の女中と同じく絹のかたびらを着せ、「此たびの科人此内にあれば明日残らず拷問する」と申渡し、翌朝すこしも皺のよらざる女一人有を下手人として詮議すると、犯行を自白するにいたるといふ心理把握の妙を描いている。この信憑性はともかく興味ある一篇である。「文中世の人心程にさま／＼替れる物はなし」として、座敷牢中の大胆な女心を評しているが、西鶴のもう一つの興味が、こうした様々の世の人心にあつたこともうかがえよう。こゝに、道化た筆の奥にひそむ西鶴の観察眼の鋭さを見逃すことは出来ぬと思う。

この眼の鋭さは、さらに巻三ノ四「落し手有拾ひ手有」にいたつて、一段の興味と鋭さを示す。

この説話は、すでに先学の考証により「板倉政要」の「聖人公事捌」の翻案たることが立証せられている。しかし、この「板倉政要」の捌きが、いわゆる三方一両損の域にとどまるに對し、西鶴がこれをもう一步すゝめ、騙りによる詐欺事件として完全に説話原像から脱し去つてすることに注意したい。暉峻氏はこれを評して、「織留」巻二ノ四「塩うりの楽すけ」の説話との関連に於て、「当時西鶴は、不義にして富むよりは清貧の安らかさを強調しなければならぬ立場に追ひつめられてゐたために」と詮索しているが、

の拡大として興味がある。なお、この期に同じく疑獄物語的性格の「昼夜用心記」(団水、「杜鰐新書」をモチーフとすると言われる)があり、この期読者の嗜好のあらわれとして注目されるが、こゝではこれについて触れるいとまはない。

さて、この書も私は、「二十不孝」同様、一応の主題的統一を認めながら、雑話系列の一つと見るのであるが、こゝに見られるのは、かれの及ぶかぎりの実証性合理性である。かつて徳富蘇峰氏が西鶴を評して、「西鶴の其の問題を取扱ふや、概して科学者の態度」とし、「西鶴は検事でなければ裁判官」^(註18)だとして、この書に於て、特にその評があてはまると思う。しかも、その西鶴の科学性は都の錦から「文盲」と罵倒せられる程に文献的ではなく、「世界の広きこと」を涉獵し、実証し見聞したところによるものであつた(もちろん、この科学性が、近世の文化の未発達世俗巷間の誤謬等により、こんにちにおけるそれの如くでないことは言うまでもない)。

いささか作為めくが、巻三ノ一「悪事見へすく揃帷子」はその一つである。

素材は妾の本妻毒殺事件。これも決して珍奇のことではない。犯人捜査の心理学的方法に異色がある。

発明なる御かたに此せんさくを御頼みあそばせしに、皆々女中の義なればきびしくもならず、殊更罪なき者を難儀にあはせる事

それ程までに見なくとも、これが当時の社会事象であり、

リアリスト西鶴の異常な洞察が「落し手有拾ひ手有」のユニツクな説話構成をとらしめたと見るべきであらう。

ときに、森鉄三氏は、「懐硯」その他を西鶴作にあらずとする論中、これらに西鶴特有の警句のないことを指摘しているが、これを「棠陰比事」に類推して考えるなら、この書にも警句らしきものの存在は見当らない。しかし、たとえばこの「落し手有拾ひ手有」、この標題自体極めてアイロニツクな警句ではなからうか。その他、巻三ノ六「待てば算用もあいよる中」、巻五ノ三「白浪のうつ脈取坊」など、同じことが言えそうである。前者は、仲人屋の年令詐称によつて惹き起された事件への俳諧的諷刺であり、後者はまた、西鶴の科学性の一例である。

論が脇にそれたが、「白浪のうつ脈取坊」に次の一文が見える。

惣して人間は其生れつきによつてすこしの事にもおどろく者有又身の大事を引請てもかつてどうぎぬ者有、罪なき拷問する事道理ならず

傍線(1)が「悪事見へすく揃帷子」の「世の人心程さまさま替れる物はなし」に通じ、(2)が拷問否定への積極的な提唱であることは言うまでもない。これもやはり、「大矢数」(第十三)の「頭は猿与力同心召連て」する非道横暴の裁

きへの鋭い批判精神と見るのは思いすぎであらうか。

そしてこれは、裁判ものたる本集だけにかぎつたことではない、「懐硯」卷三ノ五「誰かは住し荒屋敷」にも、「科なき事に一命を取、主なればとて非道はたつまじ、此一念つゝに思ひしらすへし」の奇怪に迫る迫真性をもつて現れる。

なお、西鶴の世の微妙な人心の描写、また、その科学性については「諸国咄」卷二ノ六、少女誘拐者に取材の「男地蔵」、卷五ノ二「恋の出見世」の異常の父性愛物語、また、「椽陰比事」卷五ノ五「あぶなき物は筆の命毛」の筆跡鑑定、同じく七「煙に移り気の人」のインキキ喝破その他と、いろいろな問題を提供するが、煩わしいので省略する。

主として材を「椽陰比事」に求めたが、西鶴説話文学の一特質がこゝにも示されると思う。

註18 「近世日本国民史」元祿時代篇

註19 「国語と国文学」昭和二十五年十一月号、「西鶴研究」第三集(戦後復刊、昭和二十五年号)、「俳句研究」昭和二十九年一月号、二月号などがある。

五

次に、怪異譚とも称すべき一群について見よう。まず、諸国咄卷一ノ二「見せぬ所は女大工」がある。これは、目

録下段にも「不思議」とあり、西鶴も一応怪異譚として執筆したものと見られる。

京一条小反橋の女大工が、或る秋の末に、呼ばれてさる奥局の御殿の寝所の袋棚えびす大黒殿まで打ちこぼると命ぜられる。不審のままに理由を尋ねるとその訳は、過ぎし名月の夜、奥方は機嫌よく更けるまで腰元などを相手に琴などを引かせて横臥して居られたが、ふと人々が天井を見ると、「四つ手の女、貌は乙御前の黒きがごとし、腰うすびらたく、腹這にして、奥さまのあたりへ、寄と見へしが、かなしき御声を、あげさせられ(奥さまが)」たので大騒ぎとなり、守刀を持つてかけつけると、妖怪は姿を消し何のこともなくてすんだが、畳に血痕が残つてあつた。これを不思議と卜者に占わせると、家中に災をなすものがあるというのである。そこで部屋中を打ちこぼつたが何の仔細もなかつたが、最後に叡山より御祈念の札板をおろすと、上より七枚下に、長さ九寸ばかりの屋守が胴骨を釘に閉じられながら、紙程にうすくなつて生きていた。これをそのまま焼き捨てたがその後は何の怪異現象もなくすんだ。

さて、この説話について、後藤興善氏は、これを「著聞集」卷二十、魚虫禽獸第三十の、釘を打たれて六十余年も生きていた蛇の話と、同じく卷二十、蛇と下女の話の二つに原拠を設けて考証しているが、考証事実の当否はさてお

き、こゝでは、作者の怪異そのものに対する姿勢について検討しよう。

これも「著聞集」卷第二十、魚虫禽獸第三十に次の二つの説話が見える。

(一) 或る田舎者が上京の折に捕えた一匹の鼠を、何の気もなく宿の柱にへしこめておく。一年の後上京してかの鼠を見ると、やせがれてもまだ生きていたのでいたずらに腕が赤くなるまでかませて見たが、これが瘡になつてその男は死ぬ。

(二) 北小路堀河あたりの村の或る女が、隣の女に教えられて、鼠の穴へ入つた蛇を熱湯をそそぎこんで殺す。その翌日、蛇を殺すことを教えた女は蛇の執念のため苦患をうけて、験者の「いかに祈るともかなふまじ」のことが通り、蛇の死んだと同じ時刻に悶死する。

そして、第一話には「あからさまにもあとなき事をばすまじき事也」、第二話では「かやうの事はながく人のすまじき事也」の教訓が附加されている。第一話は、素材も鼠でありいくら愛敬めくが、第二話の陰惨不気味さはどうであらうか。

ところで、この屋守の執念説話との比較である。それは、西鶴の「紙程薄なりても活てはたらきしを、其まゝ煙になして、其後は何のとがめもなし」と「著聞集」「いかにいの

るともかなふまじ……よしなきことをばいひをしへてわが命をばころしつるぞといひて、やがてとりころしてけり」との差異に、集約して見ることが出来る。畢竟、西鶴においては怪異現象を説話の契機としてとりながら、しかも、怪奇を超えた人間の勝利が謳われる。それは、「二代男」卷二「百物語に恨が出る」の、「各揚屋の算用残るはと、高声に申せば、現にも世中は、借錢程すかぬ物はなきにや、此声聞と、化したる形消うせけるとぞ」のユニクな、極めて現世的な怪異談の系譜でもある。つまり、「見せぬ所は女大工」の屋守の怪も、焼きすてられることによつて、何の災も残さず敗北し去るのであつて、一応は、怪異を奇談めいて取上げながら、結末に陰惨な無気味さを残さずさりりとしている。或る意味では、西鶴の怪異否定の実証性とも言えよう。

仮に、後藤氏の指摘のように、これが「著聞集」二三の説話を原拠として成立したとは言え、また、そうであればなおさら、西鶴の説話原像への姿勢、発想の特異性が明確にされると思う。さらにもう一つには、前掲第二話の結末の「かやうの事はながく人のすまじき事也」の、「著聞集」の教訓のために、寓話的発想と、西鶴のこの意味での無作為性との相異が了承せられると思う。なお、これらについては、これだけの説明では不十分であるが、本稿では一

応問題提示だけにとどめる。

魚鳥狐狸のなすわざに説話性をおく怪異変化譚では、同じく巻一ノ七「狐の四天王」、巻四ノ一「形は昼のまね」、巻四ノ七「鯉のちらし紋」などがある。今一つ一つについて見ることに煩にたえないが、代表的なものとして、「狐の四天王」について検討しよう。これも、「著聞集」の復仇説話と同一系譜である。

説話は狐への悪戯にはじまる。「本町筋に、米屋して、門兵衛といふ人、里はなれの、山陰を通るに、しろき小狐の集りしに、何心もなく、礫うち掛しに、自然とあたり所あしく、其まゝむなしくなりぬ。ふびんとばかりおもふてかへる。」「著聞集」風の復仇説話、「それを何となく、腰刀をぬきて柱を少しけづりかけて、その中にへしこめてはたらかぬやうにをしおほひてけり」に、文章までも近似する。

そうした詮索はともかく、その報復に興味がある。屋敷に礫を打ちかけることを手はじめとし、いろいろの虚構を構えて門兵衛一家を坊主にする構成である。いわば典型的な報復譚であるが、読者はこゝに怪異の贅すらも見ぬであらう。残るものは哄笑だけである。「様子聞いて悔めども、髪はへずしておかし」。これも後藤氏は、狂言「六人僧」との関連を考証しているが、たしかに西鶴はこれを狂言的

もう一つ、「諸国咄」巻三ノ四「紫女」の怪異について眺めておこう。

是ぞ世に伝へし、紫女といふ者なるべし、是におもひつかるゝこそ、因果なれ、人の血を吸、一命をとりし事ためし有

これが果して、先行「牡丹燈記」(「剪燈新話」)「奇異雑談」(「御伽婢子」)その他を、文献的原拠としたかどうかの考証は、それぞれ権威にゆずるとして、こゝで西鶴は同じくこの説話原像に依存しながら、「紫女」では明らかに西鶴的「牡丹燈記」として再現せられている。私たちはこゝに、西鶴の原話再現の一つの態度を見ることが出来る。そして、私見に従えばこの種怪異譚は、西鶴にとつて決して得意の領域ではなく、読者の要求を完全に満足せしむる性質のものではなかつたと思われる。西鶴の領域は、やはり現実説話の生きた人心の機微の描写にあつた。

なお、「諸国咄」巻二ノ一「姿の飛乗物」、同じく巻二ノ三「水筋のぬけ道」、「懐硯」巻四ノ三「文字すわる松江の鱧」その他についても検討を要する問題を残しているが稿を改めて批判を仰ぎたい。また、これら雑話ものの中には、当然町人ものの領域に於て見らるべき数篇もあるが、それらについても割愛した。(一九五四・二・稿・同四・補稿)

註20 「西鶴研究」第三冊(戦前版)所収「古今著聞集と西鶴の説話」

西鶴雑話ものの性格

世界に於てとらえている。こゝには健康な笑いが存在するだけである。

これはまた、同じく巻三ノ三「お霜月の作り髭」となつて再び哄笑を呼ぶ。いわゆる一つ咄的興味に依存しただけの説話にすぎないが爽快である。鈴木敏也氏は、これをさらに懐硯巻三ノ一「水浴は涙川」にまで発展させて論じているが、^(註22)とに角、報復を受ける一人、武右衛門の女房に、「馴染て四十三年、今になつて去るゝ是はいかなる因果」となげかせるあたり、西鶴一流の手法であらう。尤も、「お霜月の作り髭」「水浴は涙川」二篇は怪異ではなく論外であるが、こゝにも西鶴雑話ものの性格の一貌を見ることが出来ると思う。また、こゝに輯録の魚虫狐狸の説話の一つ一つが、極めて愛すべき怪異変化であり、これらに西鶴説話文学中の御伽草子的要因の一端を指摘することも出来るか。

そして、こゝに西鶴の非科学性を言うことは易しいが、これらの説話から、こうした魚虫狐狸の仕業の珍奇性を省くとすれば、それはもはや説話性を喪失するにいたる。西鶴が狐狸譚の实在を信じていたかどうかの詮索よりも、私たちは、当時の世俗の狐狸妖怪への興味と関心の実態と、本集の説話文学としての性格を知れば良いのではなからうか。

註21 「西鶴研究」第二集(戦後復刊、昭和二十四年号)所収「西鶴説話の一考察―狂言「六人僧」から―」

註22 前掲(註20)所収「草の種」

附記

稿を整理するいとまもなく、標題の真意をつくせぬまゝに、性急な問題提起だけにおわり、課題の多くが核心にふれられずに残されました。月にはきかしても余所には漏ぬむかしの文枕、杜撰のそしりはまぬがれられません。未定稿として補足を期したいと考えます。